

はしがき

戦後資本主義世界の安定はいまや過去のものとなり、日本資本主義の「高度成長」もまた終焉して、危機の時代に入りつつある。この新しい時代を迎えて、日本の労働者階級は、政府・資本家階級の鋭い攻撃に直面している。インフレ、企業整備、合理化の嵐が吹きすさび、むきだしの権力的な抑圧体制が強化されると同時に、「国運」「社運」をかかげたイデオロギー攻撃が本格化しつつある。これに対して、既成の労働運動は低迷し、有効に対処することができない状態におちいつている。

このような状況のなかで政府・資本家の攻撃をはねかえしていくためには、既成の労働運動のリーダーを突きあげ、その弱腰を批判するだけでは決定的に不十分である。一段ときびしさをます状況に耐えて、階級的労働運動に身を投ずる、活動家の質と量の強化が痛切に求められている。

しかも、危機の時代における労働者階級のたたかいは、たんなる既得権擁護の防衛的なものにとどまらずには勝利するものではない。当面する危機は、労働者階級自身が職場闘争の復讐を通して、ふたたび活力をとりもどし、政府・資本家階級の攻撃をはねかえし、労働者階級が資本家階級にとってかわり、みずからを支配階級として打ち立てるたたかいに勝利することによってしか、解決しないものである。

こんじちの活動家は、この重い課題にこたえうる理論をもとめている。

この実践的な課題にこたえるためには、当面する政治・経済情勢を正しく分析し、政府・資本家階級の攻撃を

的確にとらえると同時に、労働者階級の主体的諸条件を明らかにし、過去・現在の労働運動の経験から学ぶことが不可欠である。

ii

わが「労働運動研究者集団」は、右のような趣旨に賛同する社会科学の研究者をあつめて、一九七六年一〇月に発足した。われわれは、この趣旨に賛同する点では同一のイデオロギー的立場にたっているが、当然のことながら、こんにちの労働運動がとるべき戦略・戦術について、単一の見解に到達しているわけではない。また、平常の専攻分野も、経済、政治、法律、歴史などさまさまであって、同一の研究手法によっているわけではない。われわれは、こんにちの歴史的現実が投げかけている問題に、右に述べた立場からこたえていくために、既成の学問の境界にとらわれず、社会科学者としての協同作業を追求しようとしているのである。

今回発行するシリーズは、われわれが最初の仕事として『月刊労働問題』誌上で発表した論文に補正をほどこしたものに、さらに新たに執筆した論文を加えて、こんにちの労働運動にたずさわる活動家にとって重要な課題をなすと思われるものをテーマ別に編集したものである。われわれが、この最初のシリーズでどのようなテーマをとりあげようとしているかについては、巻末の一覧を参照していただきたい。

なお、ここに発表される論文は、研究者集団の統一見解を示すものではなく、研究者集団に属するメンバー個人の責任において執筆されたものであるが、われわれは、その発表に先だって研究者集団内部での討論を組織し、できるかぎりその内容の強化に努めたつもりである。

われわれは、このシリーズが労働の現場で苦闘している活動家の皆さんに、いくらかでも参考になればと期待しているが、活動家の皆さんからご意見・ご批判をいただければ幸いである。

第一巻には、高度経済成長の終焉にともなって露呈した日本の労働組合運動の危機的な様相と、そのよってきた歴史的な根拠を解明しようとした四論文を収録した。もちろん、歴史的な回顧にあたって、どの時点にまでさかのぼるべきかについてはいくつかの考えかたがありうるが、ここでは、高度経済成長の開始されてくる頃にまでたしかえて検討してみることにした。なお、今後の展望に関しては、論者によって若干の差異があるが、それは今後深めていくべき論点として自覚している。

一九七七年九月

労働運動研究者集団運営委員会

兵	川	喜	増	戸	矢
藤	上	安	田	塚	吹
忠			壽	秀	
剣	雄	朗	男	夫	晋

シリーズ・階級的労働運動への模索

第一巻・労働組合運動の危機

- 第二章 資本主義の危機と労働運動の危機 戸塚 秀夫
- 第三章 春闘の思想と戦場闘争論 兵藤 剣
- 第四章 IMF・JCの形成とその性格 田中 学
- 第五章 七七春闘の総括と労働運動の展望 下山 啓雄

第二巻・スタグフレーション

- 第一章 世界危機の構造と論議 川上 忠雄
- 第二章 IMF体制の崩壊 加藤 栄一
- 第三章 スタグフレーション—米を中心に— 馬渡 尚徳
- 第四章 スタグフレーションと日本資本主義 増田 壽男

第三巻・所得政策と労働運動

- 第一章 資本主義の危機と所得政策 森 恒夫
- 第二章 アメリカの所得政策 萩原 進
- 第三章 社会契約とイギリス労働運動 菊池 光造
- 第四章 フランスの所得政策と労働運動 玉田 英治
- 第五章 日本における所得政策論批判 高木 督夫

第四巻・企業倒産と労働運動

- 第一章 企業倒産と日本資本主義の現段階 柏谷 信次

労働運動研究者集団編

- 第二章 企業倒産と中小企業労働運動 戸塚 秀夫
- 第三章 全金兩大阪の闘い 佐野 修
- 第四章 企業倒産における労働者の権利 宮島 尚史
- 第五章 UCS争議の教訓 岡山 弘子

第五巻・日本型所得政策と国民春闘

- 第一章 日本経済の現局面 鎌倉 孝夫
- 第二章 経営者団体の賃金政策 山下 文夫
- 第三章 国民春闘路線の形成とその問題点 兵藤 剣
- 第四章 七八春闘の総括と今後の労働運動 池田 信

第六巻・「経営参加論」批判

- 第一章 西ドイツ共産党憲法 徳永 重良
- 第二章 経営参加問題とイギリス労働運動 栗田 健
- 第三章 イタリア労働運動と経営参加 河野 誠
- 第四章 日本の経営参加論批判 熊沢 誠

第七巻・資本主義の危機と労働者闘争

- 第一章 ロシア革命とソウヴェート 藤本和貴夫
- 第二章 ドイツ革命とレーテ 木村 靖二
- 第三章 フランス人民戦線と労働者闘争 吉田八重子
- 第四章 イレシスタンスと労働者闘争 北原 敦